20250203　展覧会が開幕します！こどもの創造性を育む教育を！

今日は、立春です！例年としては、まだまだ寒さが続く２月ですが、沈丁花、こぶしなどの蕾もどんどん膨らんできています。春はもうすぐそこまで来ていますね。

さて、いよいよ今月６，７，８日に２年に１度の展覧会が行われます。こどもたちの力作が並ぶのが本当に楽しみですね。校長ブログも随分間が空いてしまいました。これまでは、主に気候変動など様々な危機に対して、発信してきましたが、今回は、日本の美術教育についてお伝えしたいと思います。

ところで、明治、大正期に日本で美術（図画）教育というと、教師が示した手本の模写が主流でした。それは、大人の用意した訓練プログラムで、「できない」を「できる」に徐々に高めていく指導でした。その指導姿勢に一石を投じ、こどもの創造性を育む教育を提唱した一人に山本鼎（右写真）という画家・版画家がいます。もともと木版の彫り職人だった彼は、自分の感性を自由に表現したいと東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部の前身）に進学し、芸術家を志します。成績は首席を争うほどで、卒業後はパリにも留学し、そこで島崎藤村と親交を結びます。

そんな彼が、帰国途中に立ち寄ったモスクワで、こどもたちの生き生きとした絵、名もなき農民が生み出した美しい工芸品と出合い衝撃を受けます。特に、図画教育にあって絵画技術や方法が重要なのではなく、自分の目で見て、感じ取ったものを描くことが、こどもの発達にどれほど大切かを感じた彼は、その考えの下、大正８年に第１回児童自由画展覧会を開催します。この展覧会には、長野県内から児童自由画１万点が出品・展示され、好評を博しました。「自分が直接感じたものが尊い」との信念は、作家としても運動家としても常に一貫していました。

そして、この図画教育への考え方は、自由画教育運動として全国に広がって

いきます。鼎は、こどもに自由に絵を描かせる運動を進める中で、画材の研究にも取り組み、クレパスを考案したことでも知られています。今年は、鼎が「自由画教育の要点」を中央公論に発表し、北原白秋らと日本自由教育協会を結成して１０５年になります。余談ですが、彼の妻は北原白秋の妹です。

モスクワで、鼎はトルストイの家にも立ち寄っています。そこでも彼は、大きな刺激を受けています。「自由画教育の要点」の中で、こう述べた個所があります。

「トルストイは、『児童について人の道を学べ、児童は未だけがされず、－彼れ等にとりては人々皆同じ』と云ったが、私は児童等の鮮やかな創造力に驚く者だ。日々社（東京日日新聞社）の展覧会の時に、石井鶴三君（彫刻家・版画家・吉川英治作「宮本武蔵」の挿絵画家）は感嘆してかう云った。『･･･子供はみんな天才なんだ』と」

他にも、20 世紀を代表する画家、パブロ・ピカソも以下の言葉を残しています。

「子どもは誰でも芸術家だ。問題は大人になっても芸術家でいられるかどうかだ」

このピカソの言葉は、〝描きたいから描く〟という、こどもの素直な感性をたたえているように感じます。晩年、ピカソはこんな言葉も残しています。

「この歳になって、やっと子どもらしい絵が描けるようになった」

「ラファエルのように描くには 4 年かかったが、子どものように描くには一生涯かかった」

こうした先人の言葉に接するたびに、私たち大人にこそ、こどもの創造性に感動できる豊かな感性が求められているのではないかと思えてなりません。来る展覧会では、そうしたこども一人一人の感性の発露をこどもたちと共にじっくり味わっていきたいと思います。